



NPPO 法人医療ガバナンス研究所
理事長
上 昌広



かみ・まさひろ。1968年兵庫県生まれ。東京大学医学部卒業、93年東京大学医学部附属病院内科研修医、95年都立駒込病院血液内科医員、99年東京大学大学院医学系研究科修了。虎の門病院血液内科医員、国立がんセンター中央病院薬物療法医員などを経て10年7月より東大医科学研究所特任教授。16年4月から現職。

若き勤務医が変える日本の臨床研究

われわれのグループは、上海の復旦大学との交流を続けている。

6月の1カ月間、相馬中央病院の森田知宏医師と南相馬市立総合病院の山本佳奈医師が、共同研究のために短期留学した。受け入れ先は公衆衛生大学院の趙根明教授だ。

森田医師のテーマは上海の高齢化対策。特に認知症だ。山本医師は貧血である。何れも彼らがライフワークと考えているテーマだ。今回は、山本医師の研究を紹介しよう。

女性が高学歴化し、社会進出が進む先進国で、貧血は古くて新しいテーマだ。山本医師は自らの経験もあり、大学時代からこの問題に取り組んで来た。昨年には『貧血大国・日本 放置されてきた国民病の原因と対策』（光文社）を上梓した。

意外かもしれないが、日本での貧血の現状は不明な点が多い。多くの研究者が関心を持っていないため、そもそもデータがない。もっとも新しいデータは、2007年に虎の門病院血液科の久住英二医師（現鉄医会理事長）が日本血液学会誌に発表したものだ。都内の2つの病院で1998年から2005年の間に健診を受けた1万3147人の女性を対象としている。17.3%が貧血と診断され、3.3%は重度に分類された。それ以降、調査研究は実施されていない。近年、ダイエットが流行し、女性の痩せ志向が高まっている。悪化している可能性が高い。

上海でも貧血は大きな関心を集めている。経済発展著しい上海では、ライフスタイルが急速に西洋化しつつある。果実や肉類の消費も増えた。12年の1人当たりの年間の食肉消費量は53.9キロで、すでに日本（47.2キロ）を超えている。これは貧血対策にとって、好ましい変化だ。一方で、女性の美的意識が変化し、過剰なダイエットも社会問題化しつつある。コンビニも街中に見かける。

一体、現状はどうなっているのだろう



復旦大学との合同会議。右から4人目が山本佳奈医師、7人目が森田知宏医師

う。山本医師によると「上海の貧血女性性は全体の10%程度」らしい。日本との詳細な比較研究の結果は、彼女の論文が発表されるのをお待ちいただきたいが、この差は興味深い。

今回の研究は山本医師の強い希望で実現した。彼女は病院勤務医だ。大学の研究者ではなく、留学を支援する制度はない。有給休暇と欠勤扱いを用い、自分で費用を用立てた。

そのためには、コストを最小限とした。上海での宿泊は、ホテルも利用したが、共同研究相手の郁雨婷さんの自宅にも泊めてもらった。彼女の父は、上海の病院の院長を務める。山本医師は「日本とは桁違いの豪勢な自宅に驚きました」という。中国の富の偏在を実感したようだ。そして、研究以外の時間では、プライベートについてじっくりと話し合った。こうやって信頼関係が醸成される。「今度は福島に先方を招待します」という。こうやって、若き研究者の共同研究は発展していく。

これからの国際共同研究の相手はアジアが中心となる。グローバルな臨床研究を考える上で、山本医師のケースは示唆に富む。欧米と比べ、アジアは近い。そして物価も安い。かつて、国際共同研究は公的研究費がつき、海外主張などの制度が整備されている大学の独壇場だった。ところが、山本さんのケースは、やる気とスキルがあり、留守を預かる先輩や同僚医師などの仲間がいれば、若き勤務医でも国際的な研究活動が可能であることを示している。日本の臨床研究は変わりつつある。